

指導者を語る 支援者が語る

——『乳と蜜の流るゝ郷』と「ポラーノの広場」の産業組合表象——

牧 千 夏

1 はじめに

ある主張をもつ団体や運動が起こると、その主張への態度によつて段階的な立場が形成される。たとえば政党や組合には、指導する者・その指導に従う者・団体を支援するシンパ・無関心な者・反対する者という立場がまず挙げられる。そしてどの立場をとるかによつて、団体や運動のみえる部分も異なる。ある立場から平等にみえた主張が、別の立場から不平等に映ることはよくあることだ。

この問題は、文学作品で焦点化や語り手という物語の形式の問題と重なる。誰に焦点化するか、誰を語り手に選ぶかによつて、その団体や運動の何を描くかが異なる。さらに、文学作品はフィクションとして仮構されるために、意識的にであれ無意識的にであれ、そのことが鮮明となつている場合が多い。立場によつてみえるもの、みえないものが異なること、文学作品はこの問題を考えるのに適している。

そこで本稿は、産業組合を描いた二つの文学作品、賀川豊彦「乳と蜜の流るゝ郷」（『家の光』一九三四・一〜一九三

五・一二）と宮沢賢治「ポラーノの広場」（生前未発表、最終稿は一九三三年か）とが、異なる立場に焦点化したことで、産業組合の異なる側面をそれぞれ明るみに出したことを論じる。JAの前身である産業組合には、指導部上層である農政官僚、地方の指導者である産業組合課や各組合長、そしてその指導に従う組合員、組合を一部利用する非加入者、そして産業組合に反対する反産業組合運動家など、多様な階級の人々が関係し、複数の立場が形成されていた。その一方で、当時産業組合に関する言論を発表する者は限られていた。指導部上層である農政官僚がその中心であり、ジャンルは評論や論説がほとんどであった。そのなかで、両作品は文学作品として地方の産業組合の関係者に焦点化したのである。指導部上層からみえなかつた産業組合のあり方を読み解いていきたい。

具体的にはまず、産業組合の指導者に焦点化した、賀川豊彦「乳と蜜の流るゝ郷」について、産業組合によつて村を更生させる努力と困難の過程が個人の生活レベルで明らかにされた一方で、指導される者・支援者・反対者の内面や背景が

軽視されたことを論じる。次に、産業組合の支援者を語り手とした宮沢賢治「ポラーノの広場」について、自身の仕事や趣味を主として副次的に組合を支援する支援者のあり方が明らかにされた一方で、組合事業を進める中心人物の努力や苦労が表面化されなかったことを論じる。最後に、それぞれの作品が明らかにした産業組合の一面が、当時の産業組合にとってどのような意味をなしたかを論じる。

2 産業組合文学としての特徴

まずは、二作品の背景として当時の農村の状況を確認したうえで、それぞれの作品の特徴と共通点を整理したい。

産業組合が注目を集めた背景として、第一に農村の不況が挙げられる。一九三〇年代前半、農村とりわけ東北地方は貧窮を極めていた。一九三〇年の昭和農業恐慌に加えて、一九三四年には東北に大凶作が起こったためである。この東北地方の貧窮は、雑誌・新聞に取り上げられた¹⁾ことで、全国的に知れわたった。その農村貧窮に対する政策の中心に据えられたのが産業組合であった。産業組合は、農業従事者だけでなく農村不況を懸念する者からひろく関心を集めていた。こうした状況を背景として、産業組合を描いた文学作品が生れたといえる。

その代表ともいえるのが、賀川豊彦『乳と蜜の流るゝ郷』である。その特徴をみていこう。この作品は、従来より民間の立場で産業組合運動をリードしてきた賀川豊彦が、産業組

合の機関誌『家の光』に連載した小説である。そして、賀川は『死線を越えて』『一粒の麦』などのベストセラーを生んだ大衆小説作家でもあった。さらに、この作品は多くの読者を獲得していた。当時の『家の光』編集長である梅山一郎は「はじめて来月号が待ちどおしいという読者の声を聞いて、これこそ『家の光』にふさわしい読み物だった、と喜んだ」と回想しており、げんに『家の光』発行部数は、連載当初五三万部だったのが連載終了時には一一七万部まで伸び、編集部には投書が殺到したという。仮に産業組合文学という呼称をつけるならば、この作品はその王道にある。

続いて、宮沢賢治「ポラーノの広場」の特徴をみていこう。この作品は、地方で産業組合を支持した青年による草稿・習作というのが適切であろう。宮沢賢治は、残された詩作品から産業組合に関心をもったことがわかるものの、実際に組合に加入して活動してはいなかった。作品は、一九二七年頃全体的に執筆され、一九三三年に最終手入れがされたと考えられているが、生前には発表に至らなかった。現在では多くの読者を得ているものの、同時代に日の目をみなかった。産業組合文学の末端に位置する作品といえる。

二作品の同時代的のあり方は対照的であるが、物語内容ではいくつも共通点をもっている。たとえば、両者とも大まかな筋立てが、貧窮した農民の産業組合による農村更生であり、取り上げる問題としても、小作人の地主への隷属・地主と地方政治家の癒着・農村に広がる飲酒と淫蕩の害・農民の自己

本位な思考と、共通している。両作品は、産業組合の問題の基本的な部分がある程度共有していたのである。しかし、何に重点をおいて描いたのか、何を描かなかつたのかという点になると両作品は異なってくる。続く段からは、その違いについて詳しく論じる。

3 指導者を語る——賀川豊彦『乳と蜜の流るゝ郷』

この作品のあらすじを一言でいうならば、貧しい小作青年・田中東助が、並外れた勤儉・勤勉によつて困難を乗り越え、産業組合を設立して村を更生させるといったものだ。

まず、語りの構造と特徴とを確認しておく。この作品は三人称語りで、主人公の東助にのみ内的焦点化される。東助の他の登場人物の内面は基本的に叙述されない。東助の内面の叙述の特徴は、簡潔で感情よりも思索に重点がおかれる点にある。たとえば「東助は考えた。(土地利用組合を破壊することは、村の更生計画を破壊することだ。己が理事をやめて土地利用組合が生きるなら、己は欣んでやめよう——)」「(17・344)」のように、二〜四文の東助の内的な独白が、括弧とダッシュとを用いた間接語法で簡潔に挿入される。そして内面の叙述の中心は産業組合の設立・運営のための思索にあり、感情の叙述は少ない。東助は不慮の事故や裏切りなど、感情的になるはずの事件に何度となく遭遇するも、その感情はほとんど叙述されないのである。この作品は、物語内容としても形式としても東助がいかに産業組合に取り組むかという点

に焦点化されている。

次に、東助の人物造型をみていこう。作品の冒頭はこうある。

今日もまた、東助は、友人の清吉の奨めてくれるまゝに、時節外れの茄子畑に入つて、ひからびた茄子をちぎつて回つた。／妹たちは、かれこれ一週間前から、学校を休んで、朝から晩まで蝗取りに、隣村まで出かけていった。採つてきた蝗は、鍋の中で炒りつけて食べた。／去年も一昨年も、繭の値が安かつたし、今年も早魃で、畑の作物が、全部駄目になつた。それで一人の大家族を抱へていた東助の一族は九月の末から、もう食ふものは何もなかつた。(17・185)

東助は、東北凶作のあおりを受けた福島県耶麻郡の小作人一家の次男である。小作料を払うあてもなく、一家が蝗と茄子とで糊口を凌いでいる。当時の日本で多くを占めた貧しい小作青年のひとりとして、東助は造型されている。この人物造型は賀川作品のなかでよく使われる型ではない。佐藤泰正氏が指摘したように、賀川はとりわけ自伝的小説の主人公を「僕のような天才」というようなカリスマ的な救世主として造型していた。⁽³⁾東助はそれと差異化された人物だ。

このような東助に焦点化することで、物語は何を描いたのだらうか。この作品で徹底的に叙述されるのは、東助が村の

更生のために何を考え・何を実行したかである。要するに産業組合の事業内容といえるが、これを東助という個人の生活のレベルで、事細かに描き出したことに特徴がある。例として、東助の産業組合を勢いづけた鯉の養殖と販売事業の叙述をみていこう。

家の会計の心配もあつたので、また高子の家から馬と櫓とを借りて来て、その機会を逸せず、櫓の上に鯉を積んで、喜多方町に行商に出かけた。彼の考へでは、もし喜多方町で売れなければ、馬を走らせて会津若松まで売りに出たいと言ふ計画であつた。／彼は去年の秋、信州上田で魚の行商をしたこともあつたので、その計画はうまくあつた。／午後四時を過ぎ家を出た東助は僅か一時間足らずのうちに三軒の料理屋を回り、五円だけ仕入れた鯉を全部売り尽くして三円二十銭の利益を得て、電灯が灯ると間もなく、大塩まで帰つてきた〔17・263〕

この叙述からわかるように、語り手は鯉の販売が幸先のよいスタートを切つたと省略して描かない。家計の逼迫という動機付けを前おいたうえで、所要時間、運搬道具と借り手、売る場所と利益などを事細かに描き出す。引用より前の場面では、長野県上田で産業組合の鮮魚部で働き、販売の基礎を習つたことが逐一語られ、引用の後の場面では農業雑誌で学

んだ鯉の餌の作り方が細かな値まで示される。東助がひとつひとつ愚直に努力を重ねるのと同じ速度で、語り手も愚直にそれを叙述するのである。

この叙述の詳細さから、当作は単なる産業組合のプロパガンダのようにみえるかもしれない。確かにそうした面はあるにせよ、語り手の叙述の焦点はあくまで東助にある。脈絡なく産業組合の宣伝を羅列しているわけではなく、産業組合の有用性はあくまで東助を媒介して語られる。このことは「田中東助さんを努力の二本として更生の鐘を鳴らしつづけた⁴⁾」というように、読者の感想が産業組合自体ではなく東助の奮闘ぶりに集中したことからもわかるだろう。

対して、この物語は何を描かなかつたのだろうか。この物語が取り落としたのは、組合に非協力的な人物の内面や背景である。これは、東助が産業組合に専心して取り組む人物として造型されたことと、語り手が東助以外の人物に内的焦点化しない物語形式とも関わっている。内面や背景を省かれもつとも軽薄な人物として描かれたのは、産業組合に反対する地主やそれと癒着する代議士である。しかし、ここでは後段との比較のために、産業組合の支援者として登場する公務員（公職者）のグループに眼を向けたい。

ここで取り上げる公務員のグループとは、巡査・小学校校長・村長・村会議員である。彼らのはじめ、職責と対応するような使命感から産業組合に協力する人物として登場する。たとえば、産業組合設立の事務を支援する佐藤巡査は「産業

組合ができさえすれば犯罪が減るんだから、犯罪予防の立場から考へても、勤務の余暇に組合の組織を手伝つた方がいゝんだよ」〔17・284〕と、治安維持のために産業組合への協力を約束し、小学校校長も児童の共同精神の涵養のために産業組合に賛成し、理事を務める。東助をはじめとする組合員たちも、公務員・公職者という肩書のある者が、産業組合の後盾となることを期待していた。

しかし、彼らの肩書への信頼は逆転される。彼らの協力は表面的であり、自己保身的な姿が明らかになるのである。たとえば、東助は元芸者である鈴子との結婚式を産業組合の後援によって挙げるのだが、のちに校長は「もと芸者をしてゐたやうな者の媒酌を産業組合の理事がなし、その結婚式を小学校の講堂で、而も校長の司会の下に行つたと県庁に聞える」と、首になるかもしれない〔17・316〕と産業組合から距離をとることとなる。東助が産業組合学校を開こうとするのに対し、地主の平泉と代議士の山根がその阻止を図ると、村長は「平泉又吉が村で多額納税者である関係と、彼が山根代議士の乾分であり、村会議員を操縦するのに、山根派の言ふことを聞いておかないと、万事に都合が悪い」〔17・332〕と東助への協力をやめてしまう。産業組合よりも公務員・公職としての立場を優先する姿が否定的に叙述される。

その叙述と対応するように、東助と語り手による公務員のとらえ方も一面的である。東助は「村民の精神的結束が無ければ、絶対に協同組合の運動を成功させることができない」

〔17・317〕と、地主も公務員グループもまとめて、問題は精神的結束の欠如にあるとし、語り手も東助は「村から苛められ」たという。さらに、表面的な公務員グループと対比されるのが、鈴子や東助の友人たちである。東助に横領の嫌疑がかけられた際も「東助の性格をよく知つてゐる（略）産業組合女子青年連盟の幹部たちは、東助がどうしてもそんな悪事をする人間とは思へなかつた」〔17・353〕とあくまで東助を信じ、産業組合運動を推進していく。こうして、産業組合の中心人物たちの結束が強調されるとともに、地主と公務員グループとがまとめて反対勢力として位置づけられるのである。

しかし、公務員グループと地主たちとは、本来まとめるべきものではないだろう。地主たちは私利私欲のために産業組合に反対するのであり、公務員グループは職務との抵触から産業組合への協力をやめるのである。当時の文脈としても、地主や商人による反対は反産業組合運動として、未加入者などの問題と別に扱われていた。東助と語り手とは、地主と公務員との差異を認知せず、公務員グループの背景や内面を取り落としていくといえるのだ。

『乳と蜜の流るゝ郷』は、産業組合によって村を更生させる努力と困難の過程を小作人・東助という個人の生活レベルで具体的に描き出した。しかし、産業組合に非協力的な人物は、背景や内面を省かれ、単なる反対勢力として一元的に描かれていた。

4 支援者が語る——宮沢賢治「ポラーノの広場」

続いて宮沢賢治「ポラーノの広場」をみていく。この作品のあらすじを一言でいえば、大地主に住み込み奉公する少年ファゼーロが伝説の祭会場（ポラーノの広場）を探して公務員キューストの助けを借りるが、それは選挙のための酒場となっており、代わりに産業組合《ポラーノの広場》を立ち上げる、というものだ。それをキューストが語るメタフィクションとなっている。

まずは先行研究を確認しよう。先行研究では、語り手兼登場人物であるキューストに論点が集中していた。キューストは語り手という物語形式上重要な位置にしながら、物語内容において重要な役割をなさない。ファゼーロの成長と産業組合の成功という物語内容に関わっていないキューストを「傍観者」とみなし、これをどう解釈するかが重要な論点となっていた。代表的な見解として、一つ目に宮沢の実体験の反映とみる論が挙げられる。これはさらに、キューストの内面を孤独と失意と読み取り、そこに宮沢の開いた私塾・羅須地人協会の挫折の反映をみる論と、その挫折を反省し宮沢が別の生き方を仮想したとみる論とに分かれる。⁹二つ目に、レトリックとして捉える論がある。本稿でもこの立場で論じていくため、この立場の先行研究については後に参照する。

またキューストとは別の論点として、産業組合がある。眞壁仁氏は「産業組合制度が資本主義の成長過程でひきおこすひずみを体制内で調節するための安全弁にすぎないことをキ

ューストの口から語らせることもしていない⁷」と批評性の欠如を指摘した。しかし、多田幸正氏は「ありうべき産業組合を描くことで、既成の悪しき組織、国家機関化し、自主性の失われた産業組合を批判しようとしていたのではなかったか」と批評性を読み取った。島村輝氏は、産業組合が「虐待的な搾取労働」に対する「対抗原理」であると指摘した。⁸大島丈志氏は、産業組合の指導者としてキューストを捉え、当時の信用組合偏重の傾向と差異化された購買・販売組合中心の産業組合が描かれたと指摘した¹⁰。これらの指摘はどれも重要であるが、産業組合を論点とした場合、大島氏を除いてキューストがあまり考慮されなっていなかった。それはキューストの存在を見落としたというより、キューストが産業組合の「傍観者」であったために、考慮に値しないと判断されたためだと思われる。本稿でも産業組合を論じていくが、そこにキューストという論点を取り入れたい。本段ではキューストが語り手になることよって、産業組合の何を描き、何を描かなかったかを論じていく。

はじめに語りの構造からみていこう。この作品がメタフィクションであることは先述したが、冒頭では、語りの時点にある語り手兼登場人物であるキューストが、自らの性格とこれ以降に語る内容とについて概説している。

そのころわたくしは、モリーオ市の博物館に勤めて居りました。／十八等官でしたから役所のなかでも、ず

うっと下の方でしたし俸給もほんのわづかでしたが、受持ちが標本の採集や整理で生れ付き好きなことでしたから、わたくしは毎日ずみぶん愉快にはたらかました。(略)あのイーハトーヴォのすきとおった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波。／またそのなかでいっしょになったたくさんのひとたち(略)いまこの暗い巨きな石の建物のなかで考へてみると、みんなむかし風のなつかしい青い幻燈のように思われます。／では、わたくしはいつかの小さなみだしをつけながら、しづかにあの年のイーハトーヴォの五月から十月までを書きつけましょう。(11・69〜70)

ここでまず示されるは、語り手であるキューストの性格を代表する性質が、市役所職員という職業と自然に親しむ趣味とにあるということだ。はじめに、「博物局」に勤務する「十八等官」の市役所職員であることが提示される。そして「標本の採集や整理」を「生れ付き好き」としたことと対応するように、メタ物語内容である回想部分の思い起しを風・そら・森・草から始めている。この紹介は、この物語が公務員であり自然に親しむ趣味をもつ「わたくし」によって書き付けられた主観的なものであることを、読者に前提として印象づける効果がある。後述するが、このキューストの主観的な語りは物語を貫いている。天沢退次郎氏は、この冒頭から「ポ

ラーノの広場」が「かれ(キュースト…引用者注)により《採集》され《整理》された《標本》」であると指摘したが、この物語を自然科学と同様の客観的な基準に基づく「採集」や「整理」ということはできない。キューストの性格にしたがって選び取られ語られるという、主観を前面に出した叙述となっている。

物語が回想部分に進行し、ついでわかるのは、キューストが社会的な弱者に対し、同情的・協力的な性格をもつということだ。キューストは貧しい奉公人のフアゼーロとその友人ミーロに出会うが、その「旦那」である地主の暴虐な使役に怒り、地主と癒着する県会議員の暴力からフアゼーロを庇おうとする。キューストは以後もフアゼーロやミーロに同情・支援を続けるため、物語を貫く性格であるといえる。

こうして物語の始まりの部分でキューストの性格の要点が、公務員という職業・自然に対する趣味・弱者への同情の三つにあることがわかる。とはいえず議論を先取りすると、この三つの性格は均等にキューストの内面を支配しているわけではない。示された順番と対応するように、次第に弱者に同情する性格が副次的な位置にあることが明らかになる。

ではこのようなキューストによって何が描かれたのであろうか。一言でいえば、仕事や趣味を主として、副次的に産業組合に関わる公務員のあり方と内面とである。このことがまぎわかるのは、伝説の《ポラーノの広場》を探す場面である。フアゼーロは「オーケストラでもお酒でも何でもある」伝説

の(ポラーノの広場)を探すために、キューストと夜の野原に出る。ファゼーロはこれ以前に、普段休日もなく過酷な農作業に従事していることをこぼしているため、この(ポラーノの広場)の捜索は、その反動として現れた切実な希求であることがわかる。対してキューストは、ファゼーロに同情し手伝いながらも「そんなことがいまでもほんとうにあるかねえ」と疑い、協力しつつもファゼーロの切実な様子に理解を示さない。そのかたわらキューストが関心を向けるのは、美しい野原の景色である。必死に手がかりを探すファゼーロたちの脇で「おゝ、はるかなモリーオの市のぼおつとにごった灯照りのなかから十六日の青い月が奇体に平べったくなくて半分のぞいてゐるのです」と感動し、さらには「ポラーノの広場といふのはかういふ場所をそのまゝ云ふのだ、馬車別当だのミードだのまだ夢からさめないんだ」(11・83)という。ファゼーロの求めた祭としての(ポラーノの広場)を、キューストが自己流に自然美として解釈するだ。ファゼーロへの同情や協力はあくまで副次的な位置であり、キューストの趣味が先立つた語りであることがみえてくる。

これが決定的になるのが、ファゼーロが失跡しキューストが出張を命じられる場面である。この場面は、ファゼーロが地主とそれと癒着する県会議員の怒りをつたつたために失跡し、それがキューストに知れることから始まる。キューストは「さびしさや心配で胸がいつぱい」になり、「その晩から毎晩毎晩野原にファゼーロをさがしに出」(11・101)るた

め、ファゼーロへの同情が一時的に前景化する。しかし、「どういうわけか、なれたのですか、つかれたのですか、ファゼーロはファゼーロで、ちゃんとどこかにいるというような気がしてきた」と気を緩め、そこに「二十八日間イーハトーヴオ海岸地方に出張」を命じられる。

この後の語りは、この物語が何を描いたのかを考えるうえで非常に重要である。この場面は、キューストの職場での様子と心理ともつとも焦点化される。たとえば「一、北極熊剥製方をテラキ標本製作所に照会の件／一、ヤーククシャ山頂火山弾運搬費用見積り」の件／一、植物標本褪色調査の件／一、新番号札二千三百枚調製の件」と仕事の内容が具体的に叙述され、出張先での出来事を「海岸の人たちはわたくしのやうな下級の官吏でも大へん珍らしがって、どこへ行っても歓迎してくれました(略)たびたびわたくしはもうこれで死んで(も)いゝと思ひました」(11・103)と叙述する。ここでのキューストの語りは、仕事と趣味とに没頭するさまを前面に出している。ファゼーロへの心配は後景化し、忘れかけそうになるのを「何べんも強く頭をふって」思い起こすという具合である。

そして、このことは物語内容の時点のみならず、語りの時点においても通じているといえる。先の場面は、キューストにとって仕事と趣味への意欲を充足させる時間であった反面、同時点はファゼーロにとって一大転機であり、その後の産業組合《ポラーノの広場》設立にも繋がる非常に重要な時

点でもあつた。しかし、キューストが叙述した出張先での出来事は、県会議員との偶然的遭遇があるにせよ、フアゼーロにとつても産業組合『ポラーノの広場』とつても、ほぼ関係がない。それにも関わらず、前者のキューストにまつわる出来事のみを叙述したということは、語りの時点においてもキュースト自身の見方や感じ方を優先させたということである。三浦卓氏は、フアゼーロ失踪時の事情を知らないキューストが空想によつてその事情を論理化すると捉え、それが、最終的には空想を交えてでも論理化を試みるゆえに、「わからない」ことを手軽に乗りこえてしまう危険性も孕んでいる」と批判した¹²。しかし、その空想については後に空想でしかないことが判明するのであり、物語でより重要なキュースト出張時のフアゼーロの動向については想像を働かせない。むしろ、キューストは自らの仕事と趣味とを叙述している。そのため、「わからない」他者を「恣意的に領略」するというのは、キューストの語りはキュースト自身に焦点があり、他者にあまり焦点化されないとするのが適切なように思われる。

以上のようにキューストの語りを捉えたとき、キューストが仕事のために産業組合の支援からも離れる結末は、彼のあり方として当然のように思われる。この意味で、結末部分から挫折や失意を読み取るのは適切ではない。なぜなら、キューストがそもそも主としてきたのは、公務員としての職業と自然への趣味なのであり、フアゼーロへの同情や協力は副次

的な位置にあつたのである。キューストが「この友だちのな、にぎやかながら荒さんだトキオの市」で、産業組合盛況の知らせを受け取ったことから孤独や寂しさを読み取れるにせよ、産業組合に対する強い意欲を前提とした「挫折」や「失意」とはいいがたい。このことは、安藤恭子氏がこの結末について「自己否定的な言葉は単なる諦念などというものではなく、〈未来〉を意識するがゆえの「わたくし」の自己認識¹³」と指摘したこととも重なるだろう。

対して、この物語が描けなかつたものは何だろうか。それはいうまでもなく、産業組合の中心人物となるフアゼーロをはじめとする農民の内面や努力である。『乳と蜜の流るゝ郷』で重点的に叙述された小作人の更生への努力は、フアゼーロの二三の会話という間接的な叙述で済まされており、産業組合を軌道に乗せる三年間の苦労も「フアゼーロたちの組合は、はじめはなかなかうまく行かなかつたのですが、それでもどうにか面白く続けることができたのです」(11・121)と、キューストの出張先の叙述とは比べるまでもなく省略される。

「ポラーノの広場」は、仕事と趣味とを主とする公務員が副次的に産業組合に関わるあり方とその心理とを描いた作品である。フアゼーロをはじめとする貧しい農民の内面や背景、その努力としての産業組合は、間接的・省略的に描かれるのみであつた。

5 まとめにかえて——キユーストの視点の意義

ここまで『乳と蜜の流るゝ郷』が小作人・東助に焦点を当てることで、産業組合によって村を更生させる努力と困難の過程を実際に描き出し、「ポラーノの広場」が公務員・キユーストを語り手にすることで、仕事と趣味とを主とし、副次的に産業組合に関わるあり方を描き出したことを述べてきた。ここでは両作品が同時代にどのような価値をもったかを論じ、まとめとしたい。

両作品の優劣以前に言っておきたいのは、異なる立場に焦点化した文学作品が生れることで、産業組合が多面的に明らかにされたこと自体に価値があるということだ。多面性・複数性の価値を前提として、ここで特筆したいのは「ポラーノの広場」が公務員に焦点化して産業組合を表象したことである。その比較としてまずは、「乳と蜜の流るゝ郷」の同時代的な価値を述べておく。

『乳と蜜の流るゝ郷』が焦点化したのは、産業組合の主たる運営者と目された貧しい農民であり、物語内容も産業組合による村の更生という成功事例であった。したがって、産業組合の表象としては典型・理想としての価値をもつといえる。そのため地方の指導者に焦点化したといっても、一で述べたような産業組合の指導部上層の主張と齟齬はなく、産業組合の新たな一面が開示されたとはいえない。しかし、この作品でみるべきは、産業組合の理想的なあり方を小作人・東助という個人の生活のレベルで描出した点である。小作人が、

産業組合で何を売り、どれだけの収入を得たか、どれだけ思索を繰り返したか、いくら借金をしどうやって返したか。指導部上層が国家レベルの経済政策として産業組合のあり方を語ったのに対し、当人は一個人の生き方のレベルで語ったのである。

対して「ポラーノの広場」には、産業組合の典型・理想を示す価値はない。当人の価値は、産業組合のなかで周縁に位置する支援者としての公務員に焦点化した点にある。このことを論じるために、産業組合における公務員の位置づけを踏まえておこう。

産業組合のなかで公務員は、事業上の関係が薄いにもかかわらず支援を期待されるという矛盾した立場にあった。そもそも産業組合とは組合員の共同出資によって生産・販売・購買を行う社団法人である。農産物の生産・販売によって生計をたてる農民と異なり、公務員は産業組合の事業と職業上の関係はほとんどなかった。しかし、当時産業組合は特定の人のための機関ではなく、国民全体の経済機関となることが目指されていた¹⁴。とりわけ公務員は、公に奉仕するという職業のために、産業組合への協力を求められるといった状況があったのだ。大島丈志氏は一九〇二年の時点で、柳田国男が「地方の公吏」を産業組合に取り込もうとしたことを挙げ「知識ある者が義侠的に関わり、その価値を発揮する」ことが期待された¹⁵と指摘している。柳田国男は産業組合法制定当初、農商務省の官僚として産業組合に関わった人物である。時代は

下つて、組合員の側からも同様の期待があつた。『産業組合』の懸賞論文で、産業組合精神の普及のために知識人が講話を行うという案が出され、「特に学校の先生や宗教家は献身的に自分の利益を離れて、組合員に或信念を与えることができる。」と奉仕的な態度が期待されたのである。『乳と蜜の流るゝ郷』で東助が、公務員グループの協力を当然のように期待していたことは、このような当時の文脈に則つたものだと見える。

しかし、その期待に公務員は全体として応えていなかったようである。一九二九年の加入者の調査では「公務及自由業者（学校教師、僧侶、巡查等）小商人、飲食店等に加入者が少ない」とされ、このデータには「之等のなかには組合加入の必要のなきものもあらう」というコメントがあつた。また、産業組合への協力に関する公務員の側からの発言も見当たらないが、公務員がこの問題に対して積極的に発言できなかったことは想像にかたくない。職業上奉仕を求められているのに対し自己の利害を主張することは慎まれるだろう。つまり、一九三〇年前後の産業組合における公務員は、上（官僚）からも下（組合員）からも加入・支援を期待されるものの、職業上の縁遠さから産業組合への加入が進まない状況にあつたのである。

このような同時代状況を踏まえると、公務員キューストが、自身の性格を前面に出し、産業組合との関係を語つたことへの価値が考えられる。まず、公務員への期待というのは上から

であれ下からであれ産業組合を中心に発せられたものであつた。『乳と蜜の流るゝ郷』でも、公務員グループに期待していたのは東助であり、公務員グループの内面や背景に焦点化するとはなかつた。産業組合を語る場で公務員は中心化されなかつたのである。このような状況で、公務員自身を語り手に選んだ点は特筆に値する。物語内容としてもキューストの性格を前面に出し、彼にとって仕事や趣味が主であり産業組合が副次的な位置にあることをあらわにしていた。このあり方は、当時の公務員と産業組合との関係からいえば、当然であつた。むしろ公務員の加入者が少ないという状況から考えれば、公務員のなかでは産業組合に好意的な位置ともいえる。一方的な期待に困り込まれていた公務員の立場から、公務員としての産業組合との関わり方が副次的であることを、臆面なく提示していたことにひとつの価値をみたい。

この点は従来指摘されてきた「傍観者」というキューストの評価とも関係がある。「傍観者」という言葉は、産業組合を中心とした語である。しかし、「ポラーノの広場」が焦点化したのは、公務員であるキューストである。つまり作品が示すのは、キューストが産業組合の「傍観者」に在るという見方ではなく、産業組合がキューストにとって副次的な位置にあるという見方だと思われるのだ。

ある主張をもつ団体や運動において、支援者という立場は、反対者以上にその発言が着目されにくく、注目が集まりにくい。しかし、彼らも自らの生き方のなかで、その団体や運動

に関わっているのである。団体や運動を中心にしたときにはみえない、支援者のあり方を「ポラーノの広場」は垣間見せてくれる。

- (1) 『朝日新聞』では「明るい里／暗い村」一九三〇・七・二二〜九・二二、「不況の農村巡り」一九三一・六・一〇〜一八、「農村更生の途を語る」一九三二・六・一四〜七・一三、「更生へ進む町村」一九三二・八・六〜九・一一など、農村の貧窮を取材した特集が組まれた。玉真之介氏は、新聞・雑誌による農村貧窮の報道が世論を動かしたことで、政府は凶作対策を強化したと指摘した。「一九三四年の東北大凶作と郷倉の復興」（『農業史研究』四七号、二〇一三）二三〜二四頁。
- (2) 梅山一郎「乳と蜜の流るゝ郷」の思い出」（『乳と蜜の流るゝ郷』家の光協会、一九六八）四五三頁。
- (3) 佐藤泰正「賀川豊彦の文学」（『日本近代文学』一六集、一九七二）一一二頁。
- (4) 岡山県金藤稔の投書。『家の光』（一九三五・三）一五八頁。
- (5) ファゼーロは小作人といえるかもしれないが、両親がなく、地主宅に住み込みで働いているようであるため、住み込みの農業奉公人として捉えた。小作人と奉公人の違いについては、東敏雄編『大正から昭和初年

の農民像』（御茶の水書房、一九八九）「Ⅲ手伝い人の農村史」参照。

- (6) 前者は佐々木基一「ポラーノの広場」について」（『宮沢賢治研究Ⅰ』筑摩書房一九五八・八）田口昭典「『ポラーノの広場』——二十一世紀の課題として——」（『国文学 解釈と鑑賞』六六卷八号、二〇〇一）等多数、後者は桑原幹夫「『ポラーノの広場』試論——賢治のもう一つの可能性について——」（『帝京大学文学部紀要国語国文』一九八三・一〇）等。
- (7) 眞壁仁「『ポラーノの広場』をめぐる」（『宮沢賢治研究Ⅱ』筑摩書房一九六九・八）一五七・一五五頁。
- (8) 多田幸正「『ポラーノの広場』論——初期形態と最終形態——」（『日本文学』一九八八・八）四三・五〇頁。
- (9) 島村輝「ポラーノの広場と産業組合」（『解釈と鑑賞』二〇〇九・六）一六六頁。
- (10) 大島丈志「『ポラーノの広場』論」（『宮沢賢治の農業と文学』蒼丘書林、二〇一三）
- (11) 天沢退二郎「『ポラーノの広場』あるいは不在のユーロピア」（『解釈と鑑賞』四九卷一三号、一九八四）一〇一頁。
- (12) 三浦卓「宮沢賢治『ポラーノの広場』——動物のしやべらない賢治童話として」（『三田国文』二〇〇四・一二）二九頁。

(13) 安藤恭子『ポラーノの広場』論 流動する「広場」(『解

釈と鑑賞』一九八八・二)。伊藤真一郎も「「フアゼ
ーロたちと共に(広場)建設に立ち上がるような人物
には描かれていない」と指摘している。「ポラーノの
広場」(『解釈と鑑賞』一九八六・一二頁)。

(14) これについては産業組合主義として論じた。拙稿(『産
業組合主義』の比喩的展開——一九二〇年代後半から
一九三〇年代前半における展開の多様性——)(『富
山大学日本文学研究』一号、二〇一七)

(15) 前掲 大島「ポラーノの広場」論」一九七頁。

(16) 秋山正治「産業組合精神の普及徹底に就て」(『産業
組合』一九二五・二) 六二頁。

(17) 渡辺庸一郎「農村共同体建設への努力——我が農村産
業組合に関する若干の考察——」(『産業組合』一九
三〇・四) 七頁。

(18) 那須皓・東畑精一『経済学全集 第十七卷協同組合と
農業問題』(改造社一九三二・一) 三五五頁。

付記

引用文の仮名遣いはそのままとし、漢字は適宜現行のものに
改めた。末尾に括弧をつけた引用文は底本を全集とし、「巻
号・頁数」を示した。引用文が宮沢賢治の文章である場合、
底本は『【新】校本宮沢賢治全集』(筑摩書房一九九五―二
〇〇九)とし、賀川豊彦の場合『賀川豊彦全集』(キリスト

教新聞社一九六四)とした。

また本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究
員奨励費)による研究成果の一部である。

(まき・ちなつ 名古屋大学大学院生)